

「日本と東欧・スラブ・ユーラシア関係史研究会」のお知らせ 家田修

本研究会は5月6日に第一回の会合を早稲田大学で開催し、長與進氏『チェコスロヴァキア日刊新聞』における日本報道について、家田裕子「資料紹介；雑誌*The New Europe*」の二つの報告を基に活発な議論を行ないました。

長與氏の長年にわたる着実な資料解読の成果は、近日中に刊行されることが待望されております。また*The New Europe-A weekly Review of Foreign Politics*に関しては早稲田大学、筑波大学、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター等に所蔵されており、みなさんのご関心に応じて御活用ください。いずれ目次を資料公開しますが、同誌は東欧各国からの執筆者が参加して時事問題を論じており、本研究会のメンバーにとって有意義な一次資料であろうと考えます。

*The New Europe*誌に唯一の日本人として参加した「Tokiwo Yokoi」すなわち横井時男に関する豊富な資料が同志社大学に保管されているという情報を、中部大学の小島亮氏がお知らせ下さいました。厚く御礼を申し上げますとともに、是非、これによって東欧史研究者が掌握していなかった横井時男研究が伸展することを、期待します。

第一回会合には日本外交史の専門家である学習院大学長、井上寿一氏の御出席を得ました。常にないほど広い視野から討論ができ、極めて有意義な時間を過ごせました。日本史研究者との連携の必要性、および共通の知識基盤を双方向で作る必要性も確認されたと思います。同会合ではまた、専門領域の違いによる歴史理解の相違点も明らかになるなど、日本史と西洋史・東欧史、ならびに学際的分野の専門家が一同に会して議論することの、大切さと意義を実感いたしました。

本研究会の趣旨は何より日本史と西洋史の協働であり、それに基づき、日本における研究を世界に発信することにあります。これを世界史における日本とスラブ世界、ひいては日本とユーラシア世界全体との関係究明へと発展させ、双方向からの世界史像構築をめざすものです。

日本史研究者の参加が希求されており、みなさまからの御紹介を心より歓迎いたします。

次の第二回会合は以下の通りです。

報告・話題提供

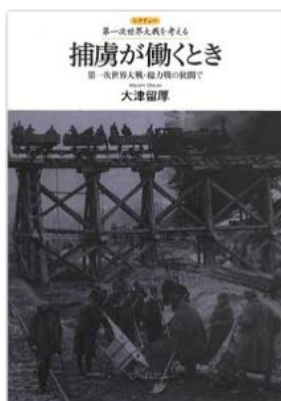
- ・ 大津留厚氏（神戸大学）「青野原俘虜収容所の世界再論」
- ・ ボスチャン・ベルタラニチ氏（城西大学）「第一次大戦期の日本におけるユーゴスラヴィア捕虜」

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館－909 実習室(前回と同じ教室)

日時：7月26日（日）13：00 ～ 17:00

連絡先：飯尾唯紀（城西大学現代政策学部）MAIL：iio@josai.ac.jp

大津留氏の『捕虜が働くとき：第一次世界大戦・総力戦の狭間で』（人文書院、2013年）および「収容所を生きる」（山室信一他編『第一次世界大戦、第二卷総力戦』分担執筆、岩波書店、2014年）が参考文献です。とりわけ前者の人文書院刊モノグラフを、是非とも事前に読まれるようお勧めします。



ハプスブルク研究の泰斗である大津留氏は、阪神・淡路大震災をきっかけに、日本にある捕虜収容所文書を委託されました。こうして大津留氏の捕虜収容所研究が開始され、さらに氏による積年のハプスブルク史研究の実績と緊密に結びあれて、独自性に富む本書へと結晶しました。国際的にも高く評価されるべき業績であると確信します。とくに若手の研究者に、本書を勧めるゆえんです。

ポーランド関連

家田修は6月にウクライナとイギリスに出張して、昨年『ポーランドに殉じた禅僧、梅田良忠』（平凡社）を上梓された梅原季哉氏（朝日新聞欧州総局長）にロンドンでお会いしました。



梅原氏は数ヶ月に一度は日本に帰国されるため、御帰国の折には本研究会で、報告をしていただくように、お約束を交わしました。是非、梅原氏の力作をお読みください。

梅田良忠は山川出版社刊『東欧史』第一版の編著者です。後に矢田俊隆編著『東欧史』第二版が刊行されましたが、内容としての『東欧史』第一版と第二版は、相互に補い合うものであり、第一版の価値を第二版がいささかも減ずる性質のものではありません。梅田良忠は日本における本格的なポーランド史の先駆的研究者として、あるいはビザンツ史、考古学研究にも大きな足跡を残しました。また梅田良忠という人物は、日本での業績を凌駕するほどに、ポーランド語によるポーランド本国での活躍が評価されているようですが、ポーランドにおける梅田の活動は日本でまだ十分に紹介されておられません。両大戦間期の日本と東欧・スラブ世界を結びつけた梅田良忠に関し、その人物像と時代背景について、種々の新たな知見を提供する著作が梅原氏の力作です。ご一読をお勧めします。

梅原氏が本書を執筆されるにあたり、多くの資料・情報提供者の協力があったと記しておられます。皆さんのなかで梅田良忠に関する研究を進めておられる方は、是非、本研究会で発表されることを期待します。また梅田良忠関連の情報や資料提供を望まれる方も、是非ご連絡下さい。将来の梅田良忠研究の伸展のために、本研究会が責任をもって活用することをお約束します。

ウクライナ危機やギリシャ危機で、欧州に広く忙しく活躍しておられる朝日新聞欧州総局長梅原氏はまた、「サラエボを100年の歴史として描き、民族対立だけではない視点からこの地を見直そうとする」作品を執筆中です。近く上梓

されるとのことで、我われも大いに注目いたしましょう。同書はサラエボの虐殺二十周年を期して、今夏に朝日叢書から刊行予定です。

・ ・ ・ ・

ハンガリー関連

両大戦間期に日本とハンガリーの間で活躍した日本人に、今岡十一郎がいます。数々の「ハンガリー語」教本、翻訳書、および「ハンガリー語辞書」の筆者として幾世代にもわたり知られてきた人物です。しかし両大戦間期にはツラニズムの提唱者であり、その社会的な影響力、とりわけハンガリー本国におけるハンガリー語による言論活動で著名な人物でもあります。語学教育以外の、戦前における今岡十一郎の活動については、十分に研究されているとは言い難い現状です。**今岡十一郎関連の資料が津田塾大学に保管されていると、同大学の浜由樹子氏から御教示をいただきました。**今岡については、解明されていない部分の方がむしろ多く、研究の進展が待たれます。私自身も津田塾大学で今岡の資料調査ができるという展望が開け、情報を提供して下さった浜由樹子氏に御礼をもうしあげつつ、同学諸子の参加と研鑽をつのる次第です。

ハンガリーに関連して、最新刊書を御紹介します。高川邦子著『ハンガリー公使大久保利隆が見た三国同盟：ある外交官の戦時秘話』（芙蓉社、2015年）です。著者の高川さんは大久保利隆駐ハンガリー公使の孫にあたられ、公使の手記や口伝を家族として保存・継承されたのみならず、イギリスの外交文書資料等を御自身で渉猟して、本書を執筆されました。高川さんによれば、戦時中の日本国と在外日本公館の交信は、暗号電文等も解読されており、英訳文書がイギリスの外交資料館に保存されて、読むことができるそうです。これまで同時期のハンガリーに関しては、今岡十一郎氏や徳永康元氏による著作が、日本人専門家の手になる同時代の記録として注目されてきました。しかし本書は外交関係という新しい視点から、しかも家伝に基づく貴重な資料を用いて、戦前・戦中の「日本・ハンガリー関係」を描いています。本研究会が発足した年に、同著作が出版されたということに対し、不思議な縁を感じつつ、感謝せずにはられません。



高川さんは独力で資料を収集・整理して歴史として出版されました。刊行にあたって井上寿一学習院大学長と家田修の助言があった旨を謝辞に記しておりますが、しかし本書は高川さんが終始一貫、自力で記された緻密な業績なのです。ここに、歴史をなりわいとする我われにとっても、大きな示唆と啓示を読み取ることができるはずです。ご一読をお勧めします。

両大戦間の日本と東欧スラブ・ユーラシア関係について、皆様からのご意見や情報・資料提供をお待ちしております。

[「日本と東欧・スラブ・ユーラシア関係史研究会発足」](#)